

「友達の姿から自分なりにまねて遊び出した事例」

男児1名 女児2名 計3名

1 子どもの実態

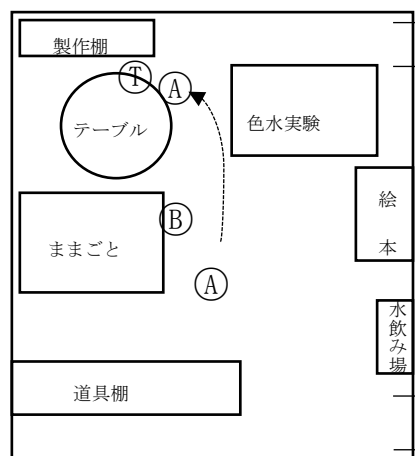
- 1学期は年少組保育室にて4人で生活しながら、遊びの中で年中児の保育室を行き来したり戸外で一緒に遊んだりして交流をもってきた。1学期末は、自分のやりたいことをしながら友達の姿に目を向け、自分なりに場や友達に関わって遊ぶ姿があった。2学期より年中組（男児2名・女児2名）と生活の場を同じにし始め、生活の場が変わったことで気持ちが不安定になる様子がどの子にも見られた。10月に入ると安心して自分のやりたいことを見付けたり、友達の姿をまねたりして遊ぶ姿が増えた。
- A男は生活の場が変わったことで、泣いて登園を渋る姿があった。少しずつ環境に慣れ、自分の興味の向いた場や物に向かい遊ぶ姿が見られ始めていた。友達と教師、友達同士が関わる様子や友達が「もの」を使って遊ぶ様子をよく見ている。自分なりにまねたりそのものを使ってみたりする姿がある。言葉での関わりがまだ難しいこともあり、相手の使う物を勝手に取ったり、友達のいる場に無理に入ろうとしたりする姿も見られる。

2 教師の願い

安心して自分のやりたいことを見付けて遊んでほしい。また、教師や友達の姿をまねたり、自分なりにやってみたりしながら、楽しいと感じたことで繰り返し遊んでほしい。

3 保育の実際（10月初旬）

年中児が1学期の経験から色水遊びを始めた。年少児もいろいろな道具や色の付いている水に興味をもち、自分なりにまねて遊ぶ姿があった。年少B子は年中児のやり方で色水を作ることをまねた後に、京花紙でも（1学期に京花紙でスライムに色付けした経験から）色付けようとカップに水と京花紙を入れて試し始めた。水の中で京花紙がトロトロに溶け、B子はごちそうに見立てて遊んでいた。A男はB子の背面の色水実験のコーナーで、いろいろな容器に水を出し入れして黙々と遊んでいた。



幼児の姿と教師の援助	教師の意図
<p>水飲み場から戻ってきた際にB子の遊びが目に入ったA男はB子の様子をじっと見ていた。①教師はその様子を見守りつつ、A男が使えるように大きめのカップと水を汲む小さいペットボトル、お盆を手元に用意した。しばらくしてA男が「A男も。」とつぶやき京花紙を手を取った。①そこで教師は「A男くんのもあるよ。」と手招きすると、A男は教師の横に座った。A男は水を汲みに行き、カップに入ると京花紙を何枚か水の中に入れて手で混ぜ始めた。「見て。」とそれぞれに言うB子とA男に「おいしそうな色になったね。」「何味かな。」などと声を掛け、教師も2人と同じことをして遊んだ。A男は時折手を止めて、じっとB子の遊ぶ様子を見ていたが、ふと製作棚に向かった。②B子が紙棒で混ぜていたので、教師</p>	<p>① A男がB子の様子をじっくりと見る時間を保障し、自分のタイミングで遊び始めるのを待った。ただ、A男は友達の使っているものを使おうとするものもある。B子の遊びも保障したかったので、教師が道具を用意した。</p>

は、「紙棒が欲しいのかな」と思ったが、A男は細く切った波段ボールを持ってきて丸めた。A男は丸めた波段ボールをセロハンテープで貼り合わせようとするが、セロハンテープがうまく切れず「テープ、テープ。」と教師に言った。教師は「ぺったんって貼りたいんだね。はいどうぞ。」とテープを切ると、A男は丸めた波段ボールを貼り合わせて、それを使って京花紙の水を混ぜ始めた。教師は、③A男が紙棒を自分なりにまねたことに気が付き、「A男くんも混ぜ混ぜ棒作っていたのか。A男くんの混ぜ混ぜ棒素敵ね。B子ちゃんのことよく見ていたんだ。」と声を掛けるとA男は「混ぜ混ぜよ。」と言った。④B子も時折こちらの様子を見るので、「B子ちゃん楽しそうだから、A男くんよく見てたんだって。」と言うとB子はうれしそうに「見て。こんなのになった。」と自分のカップを教師に見せた。

A男はB子の様子を見ながら京花紙の水を触り、何気なく砂場で泥団子を作るように手を動かしていた。気付くと小さな団子ができて自分でも驚いたようで、「お団子になった。」とつぶやいた。⑤「本当だ。A男くんお団子になった。すごい、おもしろい。大発見。」と教師が言うとB子も目を丸くして、すぐにまねた。「見て。B子もお団子になった。」と言うB子に、⑥「本当だ。お団子おもしろいね。ほら、A男くんのまねっこして私もできた。」と団子を見せた。A男の作った紙団子を年中児が見付けて一緒に作ったり、B子が紙団子を平たい形にしてせんべいに見立てたりして遊んだ。翌日以降、紙団子が固まったことが分かり、さらに作ったり木の実と紙団子を段ボール片に飾り付けたりして遊んだ。



② 紙棒を探しているのだと思ったが、全く違う物を手に取ったので、様子を見た。

③ A男のアイデアやB子の姿を自分なりにまねたり取り入れたりしながら遊ぶ様子を認められたかった。

④ B子にもB子の遊びの魅力やそれを感じて遊びをまねる友達の存在を知らせたいと考えた。

⑤⑥ A男の発見を一緒に驚きつつ、自分もまねることでA男によりうれしさを感じてほしいと考えた。また、「A男のまねっこ」という言葉を出すことで、A男くんもすごいな、楽しいな」とB子に感じてほしかった。

4 考察

- この場面において、「遊び始めたA男の視線の先にB子がいる」といった位置は、友達の動きが目に入る場所、互いのしていることを知り、まねたり取り入れたりできるきっかけ作りをするために有効であった。隣同士、向かい合わせ、少し離れた場などそのときの状況やその場にいる子どもに合わせてそれぞれの位置を意識することも、遊びが広がったり深まったりするために必要である。また、その際に教師が子どもたちのしていることをそのまままねたり、周りの友達がしていることに目を向けられるような声を掛けたりしていくことも大切にしたい。
- やりたいと思ったときにすぐにやり始められる環境があることで、安心して遊び出したり、人やもの、ことに自分から関わっていったりすることができる。しかし、①では教師が先に用意したが、②の場面のA男は、自分なりに素材を見付けたり選んだりする姿があったことから、①で教師が先回りしすぎたかと反省した。子どもの心が動いたときに、自分で素材を選んで遊び出せるように、十分に豊富な素材の準備や目に付きやすい置き方が必要である。また、一人一人その子なるものの選び方や楽しみ方を教師が十分に認め、保障していきたい。
- 紙団子はA男が偶然見付けたことである。偶然の楽しさから出た遊びをさらに広げていく、周りの友だちにも広げたり一緒に深めたりしていくことができるような教師の援助が必要である。また、一人一人の楽しさを教師が受け止め、取り上げていくことで、子どもたち同士が互いの楽しさを感じたり、まねしあったりしながら遊ぶことができるようにしていきたい。